

相互貸借について — 国立大阪病院図書館の実態を中心に —

北 沢 洋 子 (国立大阪病院)

1 はじめに

国立大阪病院図書館では相互貸借業務を開始して5年目になる。年々増加の一途をたどり、昨年度(1979年)はついに1000件を越えるに到ったので、図書館の蔵書状態と相互貸借業務の現状を調査した。この業務を通して医療情報の均等化を計るとともに、長い経験を土台に「量より質」の向上をめざしたいと願ってこゝに報告する。

1 病院図書室の資料について

病院図書室はその病院の診療や業務に必要な専門雑誌・単行書・スライド・小冊子や研修用情報資料を収集し、検索機械を系統的に活用するための施設である。院内の他の部門との大きな違いは、病院の本来の目的である診療行為が全く行われず、診療行為を医療情報サービスを通してさゝえている施設であるという事である。図書室の機能は、所蔵する資料やその資料に含まれる情報をいかに上手に利用者へ提供するかであり、それは又、仲介者としての司書の責任であり役割でもある。こゝで図書室の資料状況をみてみよう。

「医療関係雑誌所在目録 1975年版」によると、近畿病院図書館協議会加盟の34病院の所蔵

は約800タイトルで、一病院平均所蔵は100タイトルである。絶対量としては極めて少なく、また所蔵雑誌に大きな片寄りがみられる。臨床雑誌(医学一般誌)の代表的なものの所蔵状況は[表1]の通りである。

[表1]

日 本 臨 床	25病院
最 新 医 学	30病院
総 合 臨 床	25病院
N Eng J Med	23病院
JAMA	26病院
Lancet	22病院

そして、専門誌については[表2]の通りで、Kidney, Clinical Nephrology については所蔵されていない。

[表2]

糖 尿 病	4病院
肝 臓	4病院
Nephron	1病院
Circu Res	1病院
Anaesthesia	1病院
Anaesthesist	1病院

Ann Allergy	1 病院
Br J Plast Surg	1 病院
J Neurochem	1 病院
J Virology	1 病院

Virology : Vol 25 (1965)
Virol Abstracts : Vol 7 (1976)
J Virol : Vol 5 (1970)

以上は、1975年の雑誌についてのみの、所蔵状況であって、バックナンバーについては総合雑誌目録の完成をまたねばならない。しかしいくつかの病院の例を除けばほとんどの病院では1975年以後の所蔵が多いと思われる、従って医療情報の提供にはあまりにも貧弱である。当院図書館もその例にもれずバックナンバーの所蔵は少ないが、比較的古くからあるもの、またよく揃っているものは〔表3〕の通りである。

〔表3〕

- 臨床系 -

日本眼科学会雑誌 :	1 卷 (1896)
日本眼科紀要 :	1 卷 (1959)
眼 科 :	1 卷 (1959)
眼科臨床医報 :	27 卷 (1932)
Arch Ophthalmol :	Vol 71 (1964)
Am J Ophthalmol :	Vol 54 (1958)
Arch Gen Psychiatry :	Vol 1 (1959)
Am J Obstet Gynecol :	Vol 63 (1952)
綜合臨床 :	1 卷 (1952)
最新医学 :	6 卷 (1951)
Cancer :	Vol 7 (1954)
Circulation :	Vol 17 (1958)
Ame J Roentgelogy :	Vol 77 (1957)
J A M A :	Vol 163 (1957)
D M W :	Vol 76 (1951)
Surg Gyne Obste :	Vol 104 (1957)

- 基礎系 -

細 胞 :	1 卷 (1969)
真菌と真菌症 :	1 卷 (1960)
臨床病理 :	1 卷 (1953)

また現在の受入総雑誌タイトル数は欧文誌92誌(購入86誌・寄贈6誌)、邦文誌82誌(購入33誌・寄贈49誌)で、合計174誌である。しかし寄贈が多いため受入状況が不安定で、欠号が生じやすく利用に支障をきたすことが多い。学会誌は全部寄贈でまかなわれている状態であるが、現在は眼科系の学会誌は創刊号からそろえられ、充実の傾向も寄贈に頼るところが大である。しかし寄贈者の退職によって受入が中止されることが最大の悩みである。代謝・糖尿病・ホルモンと臨床・内科・肝臓等の雑誌がその例である。このように情報量にくらべ所蔵雑誌タイトル数が少なく、これを日本医学図書館協会加盟館の平均1142タイトルと比べると、10分の1強にしかならない。予算も当図書館の300万に対して、協会加盟館では平均10倍以上である。

このような資料の不足を補うために、文献の相互貸借はなくてはならないサービスとなっている。病院図書館では大学図書館と異り、時間外の夜間・休日の利用者も多い上に、図書館の専任者がいないところもあって、どうしても雑誌に欠号が生じやすい。相互貸借を行う上でも、この対策について更に工夫が必要であると考えている。

2 国立大阪病院図書館における相互貸借業務の実態

(1) 利用者について

相互貸借の利用者は医師・検査技師・放射線技師・薬剤師・看護婦で、8対2の割合で医師の利用が圧倒的多数を占めている。しかし、このパラメディカルスタッフの割合は近年、少しづつではあるが増加の傾向にある。

(2) 申込手続

(1) 申込フォーム

[図 1]

当病院図書館では、文献申込書のフォームを [図 1] のように決めているが、利用者は a) 求める文献をメモに書いてくる、b) 文末の参考文献のリストに○印をつけてくる、c) 機械検索の用紙を持ってくる、等の方法で依頼されることが多く、担当者もこれを所定の申込用紙に書き直すことは、手間と時間をはぶくためにやっていない。

文 献 申 込 書

科 氏名				
著者				
課題				
誌名	S V B T	号	頁	宛

(2) 書誌的事項の確認

利用者がメモで依頼してくる時には、書名・誌名・巻・ページ・年のみで、著者・主題が記入されていることはまずない。このような不備な点は、著者または主題のどちらかを問い直し、Index Medicus や医学中央雑誌で調査する。Cumulated Index Medicus は、著者・主題のいずれかが分っている場合は大変便利である。また巻・号と発行年が一致しないことも意外に多く、特に注意している。和文誌の略誌名には医学中央雑誌の収載誌略名表、欧文誌の場合は Index Medicus の各巻 1 号の Journal List を利用する。書誌事項については常に利用者の注意を喚起し、完全なものを持って来るように依頼したり、不備な場合の依頼先図書館の手間を伝えたりしている。1959 年以前の文献の書誌事項不備の場合には、調査資料がないのでその旨を書き添えて依頼するしかない。

(3) 所蔵館調査

依頼館の決定には、現行医学雑誌所在目録・医学雑誌総合目録（欧文編、和文編）・病院図書館医療関係雑誌所在目録などを利用する。決定に際しては、a) 速く入手できること、b) 料金が低いこと、c) 振込みで料金が支払えることを考慮している。時々、上記の目録で所在を確認して依頼しても、研究室所蔵のため

に断られることもある。

(4) ハガキ記入

相互貸借用の往復ハガキは、近畿病院図書室協議会の統一フォームのものを使用している。（[図 2] 参照）この際、当図書館の申込紙を記入する。

(5) ノート記入（控）

控への記録は返信用ハガキが戻ってくるまで利用者から受取ったメモ等の記録をそのまま利用しているが、受付月日・受付番号・申込者・依頼館等については、ノートを使って記録する。（[図 3] 参照）

(3) 郵送された文献コピーと料金処理

複写文献が郵送されてくると、a) 複写文献と返信ハガキ（通知書）記載の書誌事項・金額・ページ数を照合する。b) 控へのノートに依頼館受付紙・コピー料金・送料等を記入。c) 複写文献をとじて利用者に渡す。料金が個人負担の場合には請求書をつける。コピー料金は、当院の場合個人負担・研究費支出の二方法である。個人が負担する場合には、その都度請求したりまたは月末に請求することもある。研究費支出の場合は会計に依頼する。

3. 相互貸借業務の問題点

当院図書館の文献依頼件数は [図 4] のよう

[図2]

近病図協	大阪	対	申込No	年月日	受付No	年月日	発送	年月日		
	姓名・番号・頁・年・著者・論題・巻名備考 宛申込者：所属 氏名							複写料金		
相互利用 <input type="checkbox"/> 照会 <input type="checkbox"/> 閲覧 <input type="checkbox"/> 借用 <input type="checkbox"/> 複写 <input type="checkbox"/> ゼロックス <input type="checkbox"/> フィルム <input type="checkbox"/> ハツ切 <input type="checkbox"/> キャビネ <input type="checkbox"/> その他								基本料金	円	
								M.F.	円	
								押しその他	円	
								計	円	
								送料	円	
								合計	円	
							受領	年月日		
							受領印			
() 申込書		<input type="checkbox"/> 所蔵なし <input type="checkbox"/> 欠本 <input type="checkbox"/> 欠号 <input type="checkbox"/> 調査中 <input type="checkbox"/> 貸出不能 <input type="checkbox"/> 複写不能 <input type="checkbox"/> 参照不完 (誌名 巻 年 著者 論題 版) <input type="checkbox"/> 貸出中 (月 日頃再申込のこと) <input type="checkbox"/> 製本中 (月 日頃再申込のこと) <input type="checkbox"/> その他							国立大阪病院図書館 大阪市東区法円坂町2-1 (06-942-1331)	

[図3]

受付番号	申込者	館	月日	冊数	相手館No	料金(円)	送料	振込料	合計	備考
223	森本		4/4		6205					済
	DK					2200-	200	0	2570	
224	"				1263					済
	AG→JK		20 20			2050	200		2290	
225	森本		4/5		110					済
	AG		20			150	140		310	
226	"				111					済
	AG		20			200	現金 370		590	
227	"				112					済
	AG		20			150			170	
228	"				6206					済
	DK		20			150			150	
229	"				6204					済
	DK		20			250		20	290	

[図4]

依頼先 年	大学医学図書館 (うち近畿地区)	近畿病院図書室 協議会加盟病院	その他	合計
1976	468 (238)	187	64	719
1977	308 (187)	199	3	510
1978	723 (416)	187	0	910
1979	1132 (316)	133	6	1271

に年々増加しており、年間1000件以上になると非常に多忙となる。まして文献入手を急がれると1~2名の職員ではこの業務にかゝりきりになり、他の業務を兼ねていると相互貸借業務には自ら限界があると思われる。

今後、Index Medicus や医学中央雑誌による文献検索の利用や、機械検索が増えることにより文献複写の依頼がますます増加するものと思われる。限界ある人員で増加する利用者どこまで対応していけるかである。そこで一つの試みとして、利用者がどうしても図書館を通して文献を入手したい場合を除いて、プロパーへ依頼したり、出身校の知人に依頼できる場合はその方を優先してもらっている。いずれにせよ、増える相互貸借の利用にどう対処するかは今後の大きな課題である。そして一方では、入手された文献がどのように役立っているのか、充分満足できる文献であったか、について調査してみたいとも思う。

5. 結 び

現在日本で医療活動に参加している医師、医療従事者の大部分は病院勤務者であり、開業医であることは見逃せない。これらの人々に医療情報をより均等に流すことができるルートがあってよいのではないかと考える。そのために、JMLAと病院図書室間のネットワークをより強力なものとして確立する必要がある。機械の導入により図書館サービスは大きく変化しようとしているが、それらの変化に柔軟に対応しつつ、

必要な情報をより速く提供するために、蔵書・施設が不十分であっても情報の窓口として大きく門戸を開いておきたいと思う。「叩けよ！さらば開かれん」をモットーに自己研鑽に努めたいと思う。

この報告を書くにあたり、星ヶ丘厚生年金病院の首藤佳子氏にご指導を戴きましたことを、また住友病院・松本純子氏、回生病院・加島民子氏、行岡保健衛生学園・湯浅伸一氏の方々から資料の提供を戴きましたことを深く感謝いたします。

[参考文献]

- 菅 利信；日本医学図書館協会のあり方，医学図書館25(4)，161~163，1978
- 大阪大学附属図書館中之島分館；現行医学雑誌所在目録編集上の問題点，医学図書館23(4)，219~238，1976
- 浅野次郎；医学図書館と相互協力，医学図書館23(1)，38~40，1976
- 津田良成；医学図書館の未来像，医学図書館26(1~2)，1~11，1979
- 戸嶋 勇；図書館運営全般の立場からみたレファレンス・サービス [1]，医学図書館17(1~2)，1~6，1970
- 中川克哉；同上 [2]，医学図書館17(1~2)，8~13，1970
- 津田良成；日本医学図書館、過去・現在・将来について，医学図書館23(1)，18~28，1976
- 民村偉久；国立病院，病院，37(1)，31~34，1978

- 9) 田沢美子; レファレンス・サービスについて。ほすびたるらいぶらりあん, 11号, 4~6, 1979
- 10) 石沢実枝; 当図書室のレファレンス・サービス, 同上, 5~6, 1979

- 11) 加島民子; 院外文献複写依頼状況調査報告
日本病院会雑誌 25(1), 39, 1978



編 集 後 記

小誌「病院図書室」第2巻第1号(通巻2号)、発刊が大変遅くれてしまいました。やっとお届けできる運びとなりました。まづ早くから原稿を寄せていただきました。杉本顕俊先生、岩本、三宅両氏に深くお詫び申し上げます。また、事例報告会で発表の後、本誌に掲載のために原稿にまとめていただいた方々にも、提出を促しながら発刊ができましたこと、申訳なく存じます。

本号は、住友病院の杉本先生、滋賀医科大学附属図書館の岩本速雄氏、関西医科大学附属図書館の三宅恵子氏から玉稿をいただきました。杉本先生は図書室部長のお立場から、病院図書室をとりまく状況を指摘され、岩本・三宅両氏は医学情報網のなかの医学図書館と病院図書室の担うべき方向を論じておられます。いづれもこれからの病院図書室が取り組むべき諸問題を提起されていると思います。以下は前号のように、昨年度の事例報告会の

内容概説を掲載しました。

会誌「病院図書室」は、私達独自の研究発表の場を広げることを目的として創刊されました。まだ2号を重ねただけでは無理なこととは思いますが、会員からの自発的な投稿がなく、誌面が充分活用されていないのが残念です。私達のまわりには、病院図書室でなければ出会えない多くの問題や貴重な経験が沢山あります。その中から何か一つのことを自分の研究課題にしてみたいと思います。「時間がない」という、病院図書室を知る誰もが尤もとする理由で私達の貴重な経験が日の目をみないのでは、将来の病院図書室の進歩は望めないと思います。

これは編集者自身も大いに反省すべきことでありますが、会員の方々にも大いに期待して止みません。次号に一人でも多くの参加をお願いいたします。

(1982.3.1. 湯浅・山室 記)